

研究テーマ 訪問リハビリテーション介入による外出の短期効果と予測について

病 院 名 医療法人社団健育会 西伊豆健育会病院

演 者 ○ ^{やまぐちりょうへい}山口良平(理学療法士) 西木優(作業療法士) 羽田匡伸(理学療法士)

概 要

【研究背景】

当院所在自治体の高齢化率はH30.9現在49%で当院訪問リハ開始以降需要が高いが、居宅（介護予防）サービス利用者数全体の約2.7%である。

【研究目的】

訪問リハの短期効果として、基本動作能力の改善についてが多く、参加についての報告はすくない。外出頻度は高齢者の包括的健康指標であり、在宅療養高齢者は近年重要視されている。そこで今回、当院訪問リハ利用者が外出頻度に短期効果があるか検討した。

【研究方法】

平成30年3月から10月までに当院訪問リハを3か月以上利用した38名（男性19名、女性19名）、平均年齢 78.0 ± 9.6 歳、平均要介護度1.8。方法：1. 訪問リハ開始から研究期間最終時点（3・6か月経過）でFAI（Frenchay Activities Index）外出得点が改善・2点以上を維持した群と低下・2点未満で経過した群に分け、年齢、性別、B.I（Barthel Index）利得、FAI利得、主疾患発症から訪問リハ介入開始までの期間、要介護度、同居者有無、通所サービス利用有無、訪問リハ実施単位数/週、ケアプラン目標参加項目記載の有無をMann-Whitney検定、X²検定で検討。2. 期間最終時FAI外出得点が2点以上維持・改善の有無を従属変数、方法1の各項目（B.I及びFAI利得は開始時点数に変更）を独立変数として多重ロジスティック回帰分析で検討。3. 期間最終FAI外出得点を期間最終FAI得点、期間最終B.I得点、年齢、主疾患発症から訪問リハ介入までの期間を各々Spearmanの順位相関係数で検討。本研究は当院倫理委員会の承認を得、本人、家族に研究趣旨を説明、同意を得て行った。

【結果】

方法1では、ケアプラン目標参加項目記載の有無に有意差を認めた（ $P < 0.01$ ）。方法2では、初期FAI外出得点（ $P < 0.01$ オッズ比0.34）同居者有無（ $P < 0.05$ オッズ比9.15）を

採択、判別の中率は73%。方法3では、最終FAI外出得点と最終FAI得点に弱い相関を認めた（ $r = 0.4$ $P < 0.01$ ）。

【考察】

本研究は、訪問リハ利用者の外出頻度への短期効果、予測因子について検討した。方法1及び2から、ケアプランの事業所間の目標共有、対象者の環境が結果の要因であると考えた。方法3では、生活行為が家族などに代償されていると考えた。

【結論】

月に一定程度外出している者は、参加に関する目標を立て、外出環境が整っている場合維持・改善が見込めることが示唆された。

【引用参考文献】

(1) 蜂須賀研二ほか：応用的日常生活動作と無作為抽出法のFAI標準値：リハビリテーション医学2001；38：287-295 (2) 大沼剛ほか：訪問リハビリテーション利用者の要介護度変化とその要因：理学療法科学2016